

保育への視座(6)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

見直しは、保育の根本のところを

今一度保育の見直しをと、いろいろの角度から研修会が巷間に溢れていることはある意味で結構なことだが、その内容を聞くと少々消化不良気味のように思われる。それは保育の実際を参観して、なにかその根本のところが見不明瞭のまま実践されているようで、子どもものいきいきさが見られなかったり、逆に自由ののびのび行動しているように見えても

その実は行動が衝動的で乱暴なようすが見受けられて、これらの子どもたちにもどのように接したらよいのかという個人的な問題行動の指導に関する研修が、かなりの比重を占めていることから推察される。このことは、あるいは、ひとりひとりの尊重の保育の姿勢のあらわれとみることもできるが、問題は単なる保育技術の見直しで解決出来るものではなく、保育の根本のところが見直されないと幼

児の成長が生き生きとしたものにならないように思う。

二学期ともなるとあちこちで作品展が開催されて見せていただく機会が多いが、その作品を見て日頃の造形的な表現活動のようすが見えて来るので、これに関連して考えて見たい。

幼稚園の教育課程や指導計画を見せていただくと、各年齢の課程で入園当初は「自由に好きな絵を描いたり、いろいろな材料用具を使って好きなものを作る」と言うことが述べられていて、自由画帳などに自由に絵を描くことができるよう環境を整えたりされている。

ここで注目したいのは「自由に好きな絵を描く」ということが、幼児たちの表現への意欲がかきたてられているかと言うと、決してそうでもない。「自由に」「好きなように」と

言われていることで決して幼児に自由感が生じるとは限らないということである。

真に自由感をもたなければ、内なるものの表現力が機能しないと言うことが造形的な表現あそびの根本にあることに気づかれない方が案外多いのに驚くのである。

ここで倉橋氏のことばを持ち出さなくてもよいのだが、「自己充実を十分発揮し得るよう」に適宜適切な設備をしておきつゝ幼児にその設備を使わせていく幼稚園全体の態度が——すなわち子どもに生活の自由が十分許されていゝるものでなければなりません。……幼児の自由感こそ設備をよく生かしていくもです。幼稚園の設備も、自由感のいかんによりましてどんどん意味が拡まっていきます。」(傍・と〇は筆者)と述べられている。この自由感が幼児の内部でどうなっているのかを把握しないで、ことばのみで「自由に」「好

きなように」では、活動の援助にならないということがある。例えば「描きたくなかったら描かなくてよいよ。描きたくなったら描いてよいよ」という意味が幼児に通じた時は、真に自由感が生じるといことを心にとめておいて、表現活動をはじめ、あらゆる遊び——すなわち幼児の生活全体——の援助や指導を考えていくべきだと思う。

このことを抜いては幼児は真の自由感もてないだけでなく、自己充実や、自己統制の力も機能しない。更に「自由に描きなさい。好きなように描きなさい」では駄目だから課題を出さないと、という描画の指導論や、一斉指導論が提起されるようになり作品展の内容の多くが課題が中心となったものになり一斉に描かされたような作品が多く見られるものになって来ているように思う。しかもはじめに述べた、個々の幼児たちの気になる行動

に対する指導の問題もこのことと無関係ではないとしたら、いよいよ幼児の内面の自由感がどうなっているかの根本から保育全体を見直さなければならぬように思われる。

指導的な参考書に「主体性」「自分で」と言うことはで解説されているが、自由感のような「おのずから、すなわち自然発生的」



な力が機能することの大切についての考究が少なく、弱いように思う。

つまり、「おのずから」「自然発生的」などと言うとすぐ子どもにまかせ切って大人は何もしない放任と同じように考えて、放任さながらになされてしまう。それが駄目だと考えるところ今度は、極めて操作主義的に幼児に活動や課題を指示・命令されてしまわれることになっている。

すべての幼児がもっている生長への衝動のようなものが働くように援助することこそ、幼児保育の第一歩であることが余りにも深く理解されていないのではないかとも思う。(少しおこがましい言い方になったが) ここるところで幼児の生活に生命いのちが通うかどうかということになる。

次の実践事例はF幼稚園の三歳児担任のK先生の報告の中から抜抄したものである。

*

——学期の終わりのある日、幼児たちは、保育室の一隅に準備しておいた広告紙や新聞紙を出して来てあそぼうとするが、思うように巻けないと思うと試みようともしないで、「剣作って」ともってくる。きょうは「はいはい」と言って作ってあげる。

以前は、全部作ってしまったら、子どもの自発性も育たない、また、創造的な表現態度をも育てほしいと思うと、どうしようかと迷ってしまい、「ほくは作れるでしょう」と励ますか少し手伝って「こうすれば」と、やり方を少し教えあとをまかせるような援助をしていた。

これでは中途半端なかかわり方になっていることに気づいて、子ども自身が作品をつくることに前に、教師とかかわりたい気持ちをも満足させてやり、同時に教師の作り方をよくみてくれればと考えるようになって、せつせと惜しみなく楽しく

手伝うようにしてみた。するとけんじ君が私の隣にちよこんとすわって自分も紙を丸めようとしているのに気づいた。前から、少しは作ろうとするが、結局「作って」と言っただけで来ていた子どももただだけに、「剣を作るの」「先生が手伝わなくてもいいの」というと、「けんちゃんがする」と言ったので、「えっ、できるの」と心の中でつぶやいてしまった。先を少し丸めると手のひらですべらせるようにして丸めていた。けんじ君は、丸めやすい紙を五枚もって来て、細くて堅い棒状のものを五本つくり、一本を剣の柄に使ってその上に四本をのせて、テープで止め、「できた」と言う。丸める私の手つきをじっと見ていたのである。いつもは、教師が作りながらよく見なさいと手本を示すようにしていたが、子どもはそっぽをむいているようにも思っていた。

私自身ももっとたのしみながら剣を作ることをやっていた方が、子どももたのしそうに、私に協

調や共鳴する如くよくみて、作りたいという意欲をもち、たのしんでくれるという実感をもった。「よくみなさい」「作りなさい」「やってみてごらんなさい。」でなく、じっと見つめ、よしぼくもやってみようという雰囲気にかいたのしく作っていくかが援助であり、指導なのだと思っただ。子どもたちは作る力をもっている。「作ろうとする意欲や心持ちにかかわることこそ保育の第一義だと確信のようなものを持つことができた。」（・は筆者）――

*

（元・洗足学園短期大学）